

## 前回までのあらすじ

流遠<sup>るしお</sup>やみひめは、小学六年生の普通の女の子。

学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅<sup>せんめつ</sup>であり、彼女はそのための

存在——〈機獣少女〉<sup>きじゆう</sup>だった。

やみひめが初めて本格的に体験した実戦。それは想像を絶する恐怖と痛みを伴うものだった。

今後の事を思い悩むやみひめとツバキ。アサトは、そんな彼女等を気分転換のためにと街へ連れ出す。

束の間の休息を楽しむ少女達だったが、そこへ事件のニュースが舞い込む。十数名の警官と衝突する、たった一人の少女。現場では発砲許可と避難勧告が出されており、状況<sup>ひつぱく</sup>逼迫<sup>ひつぱく</sup>している事が窺<sup>うかが</sup>える。明らかに普通の事件ではない。

断片的な状況からでも、少女の正体は推測<sup>てき</sup>出来る——〈カタストロ〉に取り憑かれたクラウだ。

そう判断したツバキは、一人で現場へ向かう事を告げ、やみひめ達と別れようとした。だが、やみひめは了承せず、共に現場へ向かう決意をする。

ツバキを手伝いたい。

クラウも助きたい。

そして、なによりも——やみひめは〈機獣少女〉だから。

## 登場人物

### ◆流遠るしおやみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

### ◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂たかちほツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

### ◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるMBデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

### ◆橘たちばなアサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

### ◆クラウド・P・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れた大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

### ◆神譲かみじょうハン

やみひめとクラウドのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウドとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ **The NOVEL XXXXXXX**

午後六時。帰宅の途に就く人々が、駅の構内から吐き出されていく。仕事帰りの勤め人風の人間が多いが、制服に身を包んだ学生の姿もある。

その中であつて、一際目を引く少女がいた。見た目通りなら高校生くらいだろう。女性としては長身で、細身でありながらも、出るべき所は出て引つ込むべき所は引つ込んでいる、万人が思い描くタイプの理想のプロポーシオン。長い黒髪は艶やかで、前髪の一部に白いメッシュが入っている。『可愛い』というよりは『綺麗』と評されるであろう美貌の持ち主で、男性よりもむしろ同性からの支持を得そうなイメージが湧く。

だが、それはその美貌に似合う表情をしていればの話だ。今の少女は無表情で、真つ当な神経をしている者なら避けて通りそんな雰囲気は漂わせている。下手にナンパなどしようものなら、痛烈な罵倒が返ってくる事は想像に難くない。

とはいえ、真つ当な神経をしていない者などいくらでもいる。

「君、高校生？ 美人さんだね。ひよつとして大学生かな？」

よつほどの猛者なのか、ただの馬鹿なのか、もしくは三人連れ故の強気なのかは判らないが、少女に声をかける者達がいた。どの男も年齢は二十代の前半から半ばといった感じだ、お世辞にも利口そうには見えない。ラフな格好や口調からして、よくいる暇な若者の類だろう。

「——」  
少女は彼等を一瞥すると、一瞬で興味を失ったのか、まるで最初から彼等の存在に気が付かなかったように通り過ぎようとした。

「ちよちよちよ、無視つてひどくない？ そういう態度、傷付いちゃうなく俺」

「もしかしてOLさんだった？ 私服だから気付かなかったよ」

「いや、こう見えて中学生かもよ？ 大丈夫だよ？ お兄さん達、やさしいから」

「お前は『やらしー』の間違いだろ？ あ、俺は本当に優しいよ？ 痛くしないし」

「やめるよ、お前等。ごめんね、こいつら馬鹿だから」

「はい、出ましたー。そういう紳士ぶつた態度で騙す、いつもの手段」

「こいつが一番えげつないんだよな。この前の女も——」

げらげらと笑いながらも、男達は少女を囲むようにして進路を塞いでいく。長身とはいえ、標準的な成人男性三人に囲まれれば、遠目には見えなくなる。頭の悪い会話をしているが、こういう知恵が働くあたり、慣れているのだろう。

その様子に気付く眉をしかめる通行人もいるが、誰もが我関せずと通り過ぎていく。当然だ。誰だって関係のない厄介事に巻き込まれたくはない。

少女は無言で立ち尽くしている。無表情のままだが、それは怯えて表情が動かなくなっ  
てしまったようにも見える。

「この子、ビビっちゃってんじゃん。お前が下品な事ばっか言うから」

「お前が一番言ってるんだろ。マジうけるんですけど」

「とりま、ご飯行こうよ。奢るしよ」

「ごちになりませす」

「俺、肉食いてえ」

「お前等は割り勘に決まってるんだろ」

少女を置いてけぼりにして話し続ける男達の一人が、無遠慮に少女の腰に手を回した。

少女はその行為にもまるで動じず、ただ静かに、腰に回された手を斬り飛ばした。

「……………へ？」

男の手首から先が冗談のようにアスファルトで舗装された地面に落下し、数瞬置いて、  
思い出したように男の腕の切断面から鮮血が噴き出した。

「——きゃあああああああああああああああああああああああああああッ!？」

悲鳴を上げたのは手を斬り落とされた男でも、連れの二人でもなく、その様子を見かけ  
た通行人の女性だった。

それが引き金になり、腕を斬り落とされた男は痛みで地面に蹲り、連れの二人は彼  
をその場に置いて逃げ出した。だが、それも致し方ないかもしれない。少女の両腕には、  
巨大な爪を思わせる手甲が握られていて、その衣装も何時の間に着替えたのか、白いら  
インの入ったドレスのようなものに変化していた。

明らかに尋常な少女ではない。

少女は逃げた男達を追う事はせず、周囲の喧騒にも無関心で、何事もなかったように進  
行を再開した。誰もが遠巻きにするだけで、少女を止めようとはしない。その場に放置さ  
れ、痛みを悶絶する男のために救急車を呼ぶ事さえ、少女の怒りを買ってしまいそうな気  
がしたからだ。

「——その少女、止まりなさい！」

だが、そこに少女を呼び止める者達が現れた。警官だ。タイミングから考えて、惨劇が  
起こる以前に通報した者がいたのだろう。それは少女にとっては善行だが、警官達にして  
みれば不幸でしかない。

少女を止められる者などおらず、逆に犠牲者が増えるだけなのだから。

「――」  
少女は駆け付けた警官二人を一瞥すると、先ほどと同じように無視して去ろうとする。少女が普通でない事は状況から理解しているのだろう。二人が少女の進行方向を塞ぐように、しかし距離を取って回り込んだ。残りの一人は少女から視線は外さないようにしながら、ベルトに繋がった無線機で連絡を取っている。応援を呼んでいるのだろう。

「君、止まりなさい。……言葉は通じているな？」

日本人ではない可能性を思いついたのか、無線機を使っていた警官が、躊躇いがちに少女に呼びかけた。恐らく、彼が上官なのだろう。先の二人に比べて、年齢が明らかに上に見える。

しかし、少女はまるで意に介さず歩いていく。逃げるでもなく、排除しようとするでもなく、警官の存在に気付いていないかのように。

三人の警官は、少女を中心に三角形の位置取りを維持したまま、少女に対する呼びかけは続けつつ、共に移動していく。見慣れない凶器を持っているとはいえ、相手はたった一人の少女だ。大の男が三人がかりとなれば、制圧は容易いだろう。だが、お互いに無傷でとなると難しい。特に、未成年に怪我を負わせたとなれば、世論は激しく警官を弾圧する。平和な時代において、警察や軍隊は嫌われ者になりがちだ。

やがてサイレンの音が鳴り、二台のパトカーが姿を現した。そこから降車してきたのは八人の警官で、全員が防弾ベストを着用している。パトカーの運転をしていた警官も加わり、三人が野次馬達を『危険だ』と遠ざけ、残りの十人が少女を包囲し、その輪を縮めていく。

「――」  
さすがに無視出来ないかと判断したのか、少女は歩みを止め、警官隊には聞き取れないような声量で何か咳いた。すると、少女の背中に勢いよく何かが生えた。

「は、羽根……？」  
少女の正面にいた警官が、彼女の背中に生えたものを指して言った。それは鳥のような羽毛の生えた翼ではないが、アニメに登場するロボットが背中に装備しているウイング・ユニットに似ている。そういったものに馴染みがある日本人であれば、たしかに少女の背中に生えたものを『羽根』と表現するだろう。

突然の事に唖然とする警官隊を余所に、少女は羽根を展開させる。V字状に配置された左右一对のそれが上下に開き、刃を思わせる八枚のフィンが放射状に広がる。

それはまさに『機械の羽根』だ。

警官隊には羽根の機構も機能も判らない。それでも、それが自分達に害を及ぼすもので

ある事だけは本能的に判った。羽根が稼働を開始した事を悟ると、誰かの退避命令と共に、少女を包囲していた警官隊が一斉に散開した。

それと同時に、少女の周囲の空気が鳴動し、少女の姿が消えた。正確には目で追えない速さで移動しただけなのだが、その瞬間を目撃した誰もが、消えたと錯覚しただろう。そのくらいに少女の行動には予備動作も何もなかった。

最初に少女の爪の犠牲になったのは、彼女の真正面にいた警官だった。彼は散開する際、少女に無防備な背中をもちろに晒す位置にいた。山や森で熊に遭遇した際、背中を向けて逃げてはならない。目を逸らさずに、ゆっくりと後ずさりしながら離れなければ、熊は本能的に襲ってくる。これは野生動物全般に言える事だ。攻撃は最大の防衛であり、相手を倒してしまえば、自分の命が脅かされる事はない。

この少女もまた、身を護るために最善の行動をしたに過ぎないのだろう。背を向けた警官に一瞬で肉薄し、鋭利な爪を振り降ろす。防弾ベストのおかげか、爪は警官の身体にまでは達しなかったようだが、それでも衝撃までは緩和しきれない。苦悶の声を上げ、背中を切り裂かれた警官は地面に倒れ伏した。同じように一人、また一人と、警官が次々に倒れていく。

警官の一人が銃を抜いたのは、五人目の同僚が倒れた後だった。国内で開発・製造された日本の警官用の回転弾装式拳銃（「ニューナンプ」）。

制服を着用した警官は拳銃の所持を許可されているが、発砲する事はまずない。発砲には厳しい条件があり、国内で発砲せざるを得ない状況が発生する事は稀なため、そうそう銃を抜くという発想には至らないのだ。

しかし、今まさに、発砲せざるを得ない状況が目の前にある。最初に拳銃を抜いた警官に倣い、残りの警官も自分の得物を抜いた。

銃口を向け、引き金に指をかける――が、誰もが撃てない。肉体及び生命の危機に立たされている。それでも、生きた人間、それも少女に向けて発砲するなど、市民の安全を守る使命を帯びた警官に出来る事ではない。

だが、そんな事には関係ない。放っておけば仲間を呼ばれると判った以上、反撃がないからと、見逃す理由にはならない。結局、誰一人発砲する事なく、警官隊は全滅した。

第十四話

『機獣少女、散華…』

時刻は午後七時を少しだけ過ぎた頃。私達は県病院の駐車場にいた。

個人タクシーの運転手さんを説得して運んでもらったんだけど、すごく裏道とかに詳しい人で、警察に封鎖されている可能性のある道を完全に予測していた。そのおかげで私達は、こうしてくらうを待ち構える事が出来ている。

昨日の朝のニュースで、意識不明の女子大生が県病院に運ばれたと報道されていた。付近で不審な女性の姿も目撃されていて、それがクラウだとツバキは仮定した。その場合、県病院付近に現れたクラウの目的地は推測出来る。私達が今いる此処、県病院だ。そして恐らく、目的はそこに運ばれた女子大生に違いない。

仮定を前提とした推測でしかないけど、クラウの正確な現在地が判らない以上、闇雲に探し回るよりはマシだ。

「ツバキの予想が当たったみたいだ」

そう言うと、携帯電話のテレビで地元のニュース番組をチェックしていたアサトが、画面を私とツバキに見せてくれた。キャスターのお姉さんが言うには、武装した少女は県病院方面に向かっていて、近隣住民は近づかないようにと呼びかけている。

「……武装してるって言ってたね」

「はい。クラウさんで間違いないでしょう」

きっと私は思い詰めた顔をしていたんだと思う。私の言葉に答えるツバキの声もまた、沈んでいたから。

「やめるなら今だぞ、やみ子」

「アサト……」

「お前にそんな義務はない。責任もない。誰も文句なんて——」

「ううん。もう決めたから」

アサトの言葉を遮って、私はそう言い切った。

「そうだ。もう決めたんだ。」

「ありがとう、アサト」

「何がだ？ 俺は何もしてないぞ」

「心配してくれた。ここまで来てくれた。また気遣ってくれた」

「……………」

「だから——ありがとう」

「……………そうか」

アサトの口調はいつも通りに気怠げで、表情も面倒くさそうにしているけど、その方がいい。いつも通りな方が安心する。だってそれは、普段からアサトが私を気にかけてくれ

てたって事だから。

「やみひめさん、これを——」

ツバキが私に手を差し出してきた。アサトとの会話で、私が気分を持ち直した事に安心したのか、その表情はいつもの澄まし顔に戻っている。

「うん」

私が掌てのひらを上にして差し出すと、ツバキは手を開き、握っていた黒い勾玉まがたまを私に託した。それは待機モードの〈カグツチ〉だ。

「——〈拘束〉」  
リストレイン

スターティング・ヴォイス  
起 動 言 語 を 唱 え る と、自 分 の 中 身 が 書 き 換 わ っ て い く よ う な 独 特 な 感 覚 が あ り、私 の 身 を 包 ん で い た 衣 服 も 変 化 す る。借 り 物 の ア サ ト の 服 が、黒 い 和 服——M B ジャ ケ ッ ト に 変 わ り、待 機 モ ー ド だ っ た 〈カ グ ツ チ〉 も、デ バ イ ス ・ モ ー ド で あ る 白 い 機 剣 に 変 化 し て い た。〈カ グ ツ チ〉 は 変 わ ら ず 無 言 の ま ま だ け ど、M B デ バ イ ス と し て の 機 能 は 働 い て い る み た い だ。

「大丈夫なようです。機力きりよくの循環も問題なく行われています」

私の状態を見て、ツバキが安心したように言った。

人間は空気を吸って、酸素を肺に取り込む。〈機獣少女〉は更に、『機素きそ』という元素を仮想の器官であるMBコアに取り込んで『機力』に変換する。〈機獣少女〉の戦装束であるMBジャケットの維持は、機力によって行われていて、機力が強いほどMBジャケットのスペックも上昇するらしい。

「……本当に〈機獣少女〉ってやつなんだな」

アサトが少しだけ驚いたような表情で見ている。目の前で一瞬で衣服が変化すれば、前もって知っていたとしても、初見なら驚くのも無理はないと思う。

「そうだよ。ほら——」

私はその場でぐるりと回って見せ、頭頂部の狼の耳を動かして見せた。といっても、アサトの家に運ばれた時から高校生くらいの姿のまま、耳と尻尾も生えたままで、この和服姿もアサトは見ているけど。

「どうして和服なんだ？」

「これは東方大陸——私の住んでいる土地の企業の製品で、MBジャケットのデザインは土地ごとに違うんです。東方大陸は日本の影響を強く受けているらしく、和服に似たデザインも、そのためだそうです」

アサトの疑問にツバキが答えた。これは私も初耳だ。

「そうなんだ。他にはどんなデザインがあるの？」

「色々ありますよ。この国のアイドル衣装のようなものや、チャイナ服のような民族衣装っぽいもの、メイド服風のものもあります」

「まるでコスプレだな」

「私も驚きました。日本だけでなく、地球全土に、ゼヘナに似た文化がある事に」

アサトの感想に、ツバキは苦笑交じりに同意した。「機獣少女」は「カタストロ」と戦うだけでなく、惑星ゼヘナの人々に希望を与えるアイドルとしての側面もあるそうだから、見た目も重視されるのかもしれない。

「——ねえ。くらうが着てたのも、どこかの企業のMBジャケットなのかな？」

ふと思いついて、私はツバキに訊ねた。くらうに取り憑いた「カタストロ」がデータを持っていて、くらうを疑似的な「機獣少女」にした——その推測が当たっていれば、くらうのMBジャケットにはモデルがあつて、弱点も判るかもしれない。

「私が知っているもので近いデザインを挙げるなら、コダール社の『ロゼット』というブランドに似ています。機能美と造形美を両立した、洗練されたデザインで人気があります」

「メーカーやブランドで、そんなに違うものなの？」

「いえ。単純なスペックだけで言えば、大差はありません。ただ、命を預けるものですか、少しでも性能が良いものを求めるのは当然です。その上で、少しでもお洒落しゃれなものを欲しがるのは、年頃の女の子であれば普通でしょう」

《機獣少女》は名前の通り、女の子しかいない。それも十代がほとんどで、アイドルとしての側面もあるなら、デザインも重視されるのは自然な事だろう。

「じゃあ、このMBジャケットは？ 人気あるの？」

「それはムラサメ社の『ミヤビ』というブランドの試作品で、まだ市場には出回っていません。私がテストをして、結果が良好であれば製造ラインに乗るそうです」

「まるでテストパイロットだな」

「それって、すごい？」

「試験機の評価をして、問題点を見つけて報告するんだ。当然、技術だけでなく知識も必要になる」

アサトの説明を聞いて私が感心すると、ツバキは少しだけ照れたような表情になった。謙遜しているけど、本当はすごい事なんだと思う。

話が雑談っぽくなった事で、少しだけ緊張が緩んだ。気を抜いていいはずがないけど、気負いすぎてもよくないと思う。少なくとも、私はこの雰囲気心地良く感じている。またこんな風に皆で過ごしたい。そのためにも——

「やみひめさん……」

ツバキが緊張を含んだ声で私を呼んだ。私と同じものを感じているんだと思う。ツバキの視線の先、まだ顔も判別出来<sup>でき</sup>ない距離に人影があつて、こちらに歩いてくる。

顔が見えなくても、気配で判る——くらうだ。

「……じゃあ、行ってくるね」

二人に心配をかけないように、精一杯の笑顔を浮かべてみたつもりだけど、きっと出来てなかったんだと思う。当然かもしれないけど、アサトもツバキも、不安げな表情を浮かべていたから。

「……………」

私は二人に背を向けて歩きます。まだ、くらうとの距離は遠い。くらうのMBジャケットのドレスの輪郭が判る程度だ。

「——やみ子！」

アサトの声が背中越しに聞こえて、私は足を止めた。

「今から世界一無責任な言葉をお前に言うぞ」

何だろう。私は振り返らずに、続く言葉を待った。

「——がんばれ」

「っ—」

『がんばれ』——それは確かに無責任な言葉だ。この言葉自体には何の力もない。それでいて、言った方は何かした気になれる、自己満足だけの無責任な言葉。

だけど、相手の事を本気で想って言ったのなら、それは無力でも無責任でもないと思う。

だって私は、こんなにも勇気をもっているから……。

私は堪<sup>こら</sup>えきれなくなって、振り返った。もう振り返らないつもりだったけど、もう一度だけ、アサトの顔が見たくなったから。

「ありがとう、アサト！ 私——」

だけど、なんでかな……アサトもツバキも、ひどい顔してる。アサトは、落ちちやうんじやないかってくらい、目を見開いてて。ツバキも、今にも泣きそうな顔をしてる。

私は私で、ひどい倦怠感がある。何か熱いものが喉<sup>のど</sup>に込み上がってきて、それを吐き出すと、ペンキをぶちまけたみたいに地面が赤黒く染まった。

なんだろう、これ……？

そういえば、胸にも違和感がある。鈍い痛みだ。なんだろうと確認すると、見慣れないものが生えていた。白くて、鋭利で、まるで獣の爪みたいな何か。

なんだろう、これ……？

見覚えがある。くらうが両手に持っていた手甲に付いていた爪だ。

でも、くらうとの距離はまだ全然あつたはずで。昨日の戦いでも、こんな一瞬で距離を詰められる速さじゃなかったはずで。

「あ……これ……おかしい……な……」

出血のせいで、みるみる力が抜けていくのが判る。酸素が全体に行き届かないから、意識がぼんやりしてきた。身体からだがどんどん冷えていく。

「く……らう……」

首だけで振り向く。ほぼ密着した状態で、私の背中を串刺しにしている友達と目が合う。だけど、くらうは私の事なんて見ていない。知らない他人を見るような目で、ただ視線を向けているだけ。助けたかったのに。また一緒に学校に行つて、一緒に過ごして、買い物にも行きたかったのに。それももう、叶いそうにない。

「ごめん……ね……くら……う……」

振り向いているのがつらくなって、自然と正面に視線が戻る。何か叫んでいるアサトを、ツバキが必死で止めている。そっか。私を助けようとしてくれてるんだ。でも、駄目だよ。そんな事したら、アサトも殺されちゃう。けど、アサトも死んだら、またすぐに逢えるのかな。それなら、いいのかな。そうだよ。今回が駄目でも、やり直せばいい。何度でもやり直して、何度でも、何度でも、何度でも——

やり直せばいい。

そうすれば、また逢えるから……。

## あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第十四話をお届け致します。

やみ子、死す。

流遠亜沙の次回作にご期待ください。

……というのは、創作とはいえさすがに不謹慎な気がするので、悪ふざけはここまでに。まずはページ数が少なくてすみません。これはサイドストーリー# 07を同時掲載しているからではなく、ここで区切った方が良いと判断したためです。本当は機獣少女対決・第2ラウンドをやるつもりだったのですが、アサトがやみ子に「がんばれ」と言うシーンを書いている最中に、「ここから戦闘シーンに突入しても蛇足になるな……」と思ひ至りました。そういう理由で、やみ子 VS クラウ・第2ラウンドは全カットです。

余談ですが、『とりま』という言葉が嫌いです。いわゆる若者言葉やギャル言葉全般そうですが、特に嫌いです。ただ、数年後には普通に使われている可能性もあるのが怖い。『ていうか』や『ぶっちゃけ』みたいに……。

良きところで謝辞を。

チェックをしてくださった紙白さんと、「ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。」

ちゃんと戦闘シーンもありますので、そちらを期待してくださっている方もお付き合いいただけるとありがたいです。

2016 / 1 / 11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る